第6回持続可能性ディスカッショングループ

議事録

1. 日時：2016年7月8日金曜日　10：00～12：00
2. 場所：虎ノ門ヒルズ森タワー9階TOKYO会議室
3. 参加委員：枝廣委員、小西委員、崎田委員、髙座長、藤野委員、森口委員、吉田委員、(関係行政機関委員)岩川委員、湯浅委員(代理)、花井委員、鈴木委員
4. 議事録：

※議事録では「ディスカッショングループ」を一部「DG」と記載しております。

- 佐藤副事務総長　おはようございます。本日は大変お忙しい中、第6回持続可能性ディスカッショングループにお集まりいただきまして、ありがとうございます。リオオリンピック・パラリンピック大会まであと1カ月ということで、マスコミでも今、リオ一色になっていくという、そんな状況になります。ただ、リオデジャネイロ2016大会が終わりますと、東京2020大会はあとすぐです。東京2020大会に向けての話題が一層大きなものとなるだろうなと、そんなふうに思っております。

  我々の組織委員会では、実は52の分野に機能を分けまして、それぞれでどういう大会運営をしていくかという計画づくりを今やっているところであります。それぞれの計画づくりのもとになるといいますか、指針となるべきこの当ディスカッショングループのテーマ、持続可能性への配慮を先行して検討していく必要があるということで、諸々の計画に先行してその作業を行っているというところでございます。

  今日は持続可能性に配慮した運営計画につきまして、実はまだ、国それから東京都との間では意見調整を全て終えているということではないわけでありますけれども、まずはこの段階におきましても委員の皆様方の御意見を早い段階からいただき、御審議を賜って、その計画のつくり込みに生かしていきたいと、今日はその御審議をいただきたいと、考えているところでございます。

  この後、我々の予定しておりますのは、後ほど事務局からも説明ございますけれども、運営計画につきましては、一応12月の末にはIOCに提案していきたいということです。その前段として8月にはパブリックコメント、計画の素案といいますか、まだ固まってない段階ではありますけれどもパブリックコメントを行いつつ、9月以降にまたディスカッショングループ、それからワーキンググループ等々でいろいろ御意見をいただきながら計画のとりまとめを行っていきたいと考えております。

  今日はこのほかにも、アクション＆レガシープラン2016版、それから東京2020参画プログラムという仮称でありますけども、その概要の説明。それからアクション＆レガシー全体の認証の仕組みにつきまして、事務局から御説明をさせていただきたいと思います。とりわけレガシー創出に向けたアクションの促進、関係者の関与の仕方について、是非御意見

を拝聴できればと、考えているところでございます。
本日は、髙座長を初め総勢11名の委員の先生方、国、東京都の方々に出席をしていただいております。是非よろしくお願いをいたします。

- 田中持続可能性部長　メディアの方はここから退室になりますので、よろしくお願いいたします。

（プレス　退室）

- 髙座長　それでは、私のほうで進行させていただきます。
最初に、事務局から本日の会議の進行について説明をお願いいたします。

- 田中持続可能性部長　本日は、初めに持続可能性に配慮した運営計画の第一版(案)について、次に、持続可能性に配慮した調達コードについて、最後に、アクション＆レガシープラン2016(案)及び認証について事務局から御説明いたしまして、委員の皆様方に御議論していただきたいと考えております。　以上が本日の流れとなります。
なお、ディスカッショングループの委員及び調達ワーキンググループの座長を務めていただいておりました横田委員でございますが、健康上の理由から先月をもって退任されたいというお申し出がありました。現在、後任の方につきましては調整を進めているところでございます。
それでは、よろしくお願いいたします。

- 髙座長　はい、ありがとうございました。
それでは、この議事に則りまして1番の運営計画の第一版についてというところから、事務局、説明をお願いいたします。

- 事務局　資料3-2(持続可能性に配慮した運営計画 第一版(案)概要説明資料)を使って、計画案について説明。資料3-3(横張委員ご提案資料)を使って、欠席された横張委員からのご提案について説明。

- 髙座長　ありがとうございました。ただいま運営計画の概要についての説明、それからスケジュール、それから横張委員からいただいた意見についての説明もいただきました。どのような御発言でも構いませんので、御意見、御質問ございましたら、どうぞ御自由に発言してください。
どうぞ、吉田委員。

- 吉田委員　横張委員から御意見をいただいて、私も全くその部分について賛成でございます。それで、生物多様性の部分、私も書きぶりが不足しているなと思う点があるので、ちょっと意見を言わせていただきたいと思うんですけども。
特に資料の53分の36ページの辺りです。自然とのふれ合いの場の辺りは、書きぶりが3行しかないという、そういう状態になっているんですけれども、この辺りは、あるいはその前の35の自然環境の再生・生物多様性の確保の辺りにもかかってくるんですけれども。私が前々から何度も申し上げているところで、この東京湾に面した地域で行われるという東京

オリンピックのことを考えると、埋立地にもたくさん緑が回復してきて。これは、東京都の港湾局の持ってらっしゃる海上公園とかそういったところがあるわけですけれども。さらにもっと広く考えれば、千葉県や神奈川県なんかも開催地になったわけですから、そういったところにも干潟などがあります。そういったものをつないだ緑地、水辺環境というものを、単に今はもうありますけれども、ヒートアイランドというお話がありますが。さらにそのアイランドの中の、さらに小さいアイランドになってしまっているわけです。それをつないでいくということが、非常に重要だと思うんです。

一つだけちょっと例を挙げますと、先週、私どもの筑波大学のほうから東京港野鳥公園にインターンシップの学生を派遣しているものですから、働きぶりを見に行きましたけれども。葛西臨海公園なんかの場合は、京葉線を降りてすぐの場所にありますけれども。東京港野鳥公園なんかは、モノレールの駅から結構歩いて行かなくちゃいけないんですが。いい季節だったらいいでしょうけど、この暑い季節です、オリンピックが開かれるような季節だとものすごく暑い中を、しかも上は高速道路が通っているようなところをくぐって歩いていかなくちゃいけないという状態で。ではバスはあるかというと、バスは1時間に3本程度で、しかも日曜日は1本もないという、そういう状況で。

それでもかなり海外の方はいらしているんです。やっぱり国際的にはそういう大都市の近くに、こういったバードウオッチングができるようなそういう緑地があって。オリンピック中はなかなかそういうところは訪れないでしょうけど、帰国前にちょっと半日ぐらいの時間でそういったところを訪れるという方は、きっとたくさんいらっしゃると思うんです。そういったことを考えると、そういった緑地をつないでいくということも非常に重要ですし。それから、今だから緑地としては孤立した状態になってしまっていますので、それをつなぐようなコリドーとして緑地にしていくとか。それから間に合わなければ、交通機関でちゃんとつなぐとか、そういったことも必要だと思いますし。

そういったインフラをつくれば、その後の東京にとっても外国人の方が来たときに、東京に残された、あるいは再生した緑やそういった鳥などを見て帰るというような、そういうことができる場所になっていくわけですから。是非とも、そういったことを文章の中に盛り込んでいただけたらなと思います。お願いします。

- 髙座長　ありがとうございました。今、たまたま大気・水・緑・生物多様性のところの意見をいただきましたので、横張委員からもいただきましたし、吉田委員からもいただきましたので、ちょっと整理しておきます。今、おっしゃっていただいた緑地の創出ですか、それをつないでいくといった観点も必要という御指摘です。これは34ページ辺りのところの書きぶりを検討することで、対応していただけませんか。

- 吉田委員　そうですね。ネットワークということは、34ページのところにも緑地の創出の中で水や緑を線で結ぶネットワーク化というのは、これは以前から言葉として出ていたもので、書いていただいてはいると思うんですが。個別の自然環境の再生、生物多様性の確保、35ページとか36ページの自然との触れ合いの場の辺りは、あまり具体的なことが書いてないんです。これは、この委員会というよりは東京都さんの計画に負うところが多いのかもしれませんけれども。でもこれは、やはりオリンピックを目標にそういったことを準

備していくということが非常に重要だと思いますので。是非ともその辺りは東京都と、あるいはもっと言えば千葉県や神奈川県とも話していただいて、是非こういったところに書き加えていただきたいなと思います。

- 髙座長　ありがとうございます。それから横張委員にいただいた資料の5枚目ですか、この辺の農地の意味の説明がございますが。これ自身は問題ないと思うんですが、例えば資源の消費のセクションに入れるべきなのかどうかもあわせて御検討いただけませんか。もしかしたら、理念とか戦略、目標といったところで書く内容なのかもしれませんので。もちろん具体的な施策として農地を有効活用するという具体的なプログラムをつくって実施していくということであれば、書き込みは必要だと思います。
  そのほか、御意見、御質問ございませんか。では、まず、枝廣委員から。

- 枝廣委員　ありがとうございます。細かいことというよりも、全般的なことで4点お話をさせてください。
  一つ目は、低炭素の目標についてです。第一版では出せないということで、第二版で出すことを明記ということになっていますが、そこのところをしっかりと出していく必要があると思います。そうでなくても海外から見ていると日本は、CO2に関しては“後ろ向きオーラ”が出ていると思われているので。やはりかと言われないような形で、「こういう理由で今は出せませんが、この時期でこういう形で出します」ということを、きちっと出していただかないと誤解されてしまう心配があります。
  二つ目は、2-4の人権のところ、人権・労働・公正な事業慣行です。当然、調達コードでは、その調達を通じて途上国などの人権も入っていますが、運営の方でもきちんと出した方がいいのではないかと思いました。日本の中だけの話のように見えてしまう可能性がありそうです。大会に関わる全ての人々というときに、この詳細の方の書き方を見ると、国内を中心に見ているような気がしたので。その辺りは誤解のない書きぶりを工夫していただきたいと思います。
  三つ目が、一番私がずっと気にしていることで、2-5の参加・協働、エンゲージメントのところです。これは、ほかのところでも必ず必要だということで、横断的な大事なポイントだと思います。今のところは、この参加・協働、エンゲージメントに関するワーキンググループも無いですし、ワーキングが無いと事務局がそれなりの時間を割くこともできないと思うのです。ですので、やった方がいいよね、やるべきだよねとあちこちで話をしていて、何も進んでいないという状況ではないかと思っています。何らかこれを横断的な役割として、きちんと運営に関して、参加・協働・協力です、エンゲージメントができるような形の組織的なものを設けた方がいいのではないかと思っています。
  4点目は、これは運営なのかレガシーなのか、両方にかかることだと思いますが、東京オリンピックが終わった後に、オリンピックがあったから日本の社会ではNGOやNPOなど活動が進んだり、生まれたりすることが必要だなと思っています。そうしたときに、今、このNGOなどに意見を聞く対象としては挙がっているのですが、この運営を通じて、もしくは東京オリンピック・パラリンピックのビフォー・アフターを比べたときに、NGO、NPOの活動がどれだけ進んでいるか。つまりNPO、NGOの支援や推進など、そういったことをもう少し、

単に意見を聞く対象ではなくて、打ち出していただきたいと思っています。これは、運営なのかレガシーの方かわからないのですが、そういった観点が少し弱いのではないかと思っています。
以上、4点です。

- 髙座長　御指摘ありがとうございます。こういう指摘をいただいて、どうでしょうか。事務局から答えてもらいましょうか。いかがですか、すぐ答えるのは難しいでしょうが、もちろん都と国との調整がある中でいろいろ固まっていくと思いますが。
今、4点いろいろ御指摘をいただきました。

- 田中持続可能性部長　低炭素の目標については、第二版に記載するというようなことを書いていきたいとは思っております。
人権については、御指摘のとおり国内だけではなくて、海外というところもあるかと思いますので、その辺りも書きぶりを考えながら、書いていければなと思っております。
3番目の参加・協働については、本当に何度も御指摘いただいております。今後組織委員会の中でも検討しながらどうやって進めていくかということを議論していきたいと考えております。
NPO、NGOの活動がどのように活発になってきたかというところを、きちんとビフォー・アンド・アフターで確認できるかというところですが。この辺り、また議論をさせていただいて、具体的にどういう指標をとれば明らかにできるかというところを、今後議論させていただきたいと思っております。

- 髙座長　ありがとうございました。最初に御指摘いただいた、参加・協働・協力について少し後ろ向きではないかという点ですが、私も感じていることです。ただ、組織委員会とすれば、一度、宣言したら、それは確実にやり抜きたい、コミットメントを大切にしたいと思っているようです。今の段階では、この考え方も御理解いただければと思います。
それから4番目にいただいた、そのNGOの活動云々というのは、どう変化したかという評価の話だけじゃなくて、NGOの方々がどれだけコミットして、それでどれだけその後活動が活発になったかという仕掛けの話もあろうかと思います。これは後のアクション＆レガシーのところの話と関わってきますので、そこで、再度、意見をいただければと思います。
では、崎田委員。

- 崎田副座長　ありがとうございます。大きく分けて、3点ほどお話をさせていただきたいと思います。
まず1点目は、この資源管理のところですけれども、私は資源管理のワーキンググループに入らせていただいております。そこで今、どういう施設からどういう廃棄物が出るか、その課題はどこにあるかなどと、かなり詳細な話をしているんです。今回の文章の中には大事な項目は全部入っているんですけれども、それの重みづけなどそこまで話が進んでないものですから、入ってないという状況です。そういうふうに御理解いただければありがたいと思っています。
ですから、今日あまりこの文章をこう直してほしいというよりも、これを元にもう少しき

ちんと話し合いを続けていきますので。最終的に、このままパブリックコメントを出したときに、もうちょっと細かいところを話してほしいみたいな意見がたくさん来ると思うんです。けれども、これからしっかり煮詰めていくんだという、そういうことを表示してパブリックコメントを出していただき、もちろんいい意見をいただければすばらしいですし、そういうふうにしていただければいいのではないかと思いました。よろしくお願いします。
2点目ですが、参加・協働のところです。やはり私も参加・協働は大事だということでずっとお話をしてきて、今も御意見ありました。もう少しどういうところで社会とつながる場を持っているんだということを、外部からもわかりやすくしていただくというのが非常に大事ではないかと感じておりました。
一つ提案なんですけれども、この持続可能性ディスカッショングループですが、今この運営計画を話し合った後、例えば運営計画の進捗をフォローするだけではなく、参加・協働の多くの社会の方との出会いというか交流の場、受け止める場というか、そういうとしての性格をプラスしていただけたらいいのではないかと感じています。ですから新しい委員会をつくるとか、新しい組織をつくるというのではなくて、この場でそういう多くのNGOの方、多くの企業で協働型を考えておられる方、いろんな御意見の方と交流するような場として、ここをプラットホームとして活用するということもあり得るのではないかと感じております。検討していただければありがたいと思います。
3番目、最後ですけれども。全体的な印象ですが、実はここ一、二週間、オリンピックそのもののこれまでの持続可能な取組とかいろんなものを、少し資料をもう一度読み直してみました。そのときにすごく感じたのは、やはり国連の地球サミットなどで、どういう方向で今地球規模の課題が動いているのかとか、今だとG7の会合であるとか。　いろいろなそういう世界の環境状況を的確に感じながら、オリンピックは世界に影響力のあるイベントとしていつも理想を高く取り組んでいる行事なんだということを、非常にここのところ感じました。そういう視点からいくと、立候補ファイルでは言い切っている感じなんですけれども、今回の文章になってくると、何となく全体が抽象的になっているような印象があります。
もう少し、やはり私たちがどういうふうにやっていくんだという目標をしっかりと前向きに、この運営計画を皆さんで仕上げていければというふうな感じがしております。よろしくお願いいたします。

- 髙座長　ありがとうございました。今のは、質問というより決意ということでしょうか。そのように受け止めてよろしいですか。
- 崎田副座長　そういう意見をどう受け止めるかというのを、一言、返答していただいてもありがたいですが。
- 髙座長　では、田中部長よろしいですか、3点ありましたけども。資源管理のところで、これは項目しかまだ挙げてないということですね。
- 田中持続可能性部長　そうですね。今は具体的にどういうことができるかというところを、精査している中でこういう文章になっております。今後、関係各所に照会をかけていきな

がら、我々がどんな取組ができるかというところを、はっきりと書いていきたいと思っております。
2点目は、これはちょっと確認でございますが、このDGの場にNGOの方々とか、あるいは一般の方々を入れて、この場をプラットホームにしながら一般の方々の議論に向けた基礎にしてほしいというようなことでよろしいですか。

- 崎田副座長　毎回そういうふうにしてほしいということではないです。ですから、例えば今日は運営計画の議論の日で、例えば何回かに1回は多くの社会の関心のあるステークホルダーと意見交換する日とか。そういうふうに内容を切り分けていただいてもいいのではないかなというふうに、私は思って提案させていただきました。
なぜここの場かというのは、4月か5月に多くの提案をいただいたときに、九つの団体のヒアリングさせていただきました。やはり、ここがそういう場になるということは、今、全体の組織の中でもそれは非常に受け入れやすい話なのかなと感じたものですから。全く別に組織をつくってくださいという話ではなく、ここでみんなが取組んだらいかがかとおもいます。その大事さがわかっているメンバーが、きちんと一緒にやっていったらどうかというふうに思うということです。

- 髙座長　可能性も含めて検討してください。

- 田中持続可能性部長　はい、検討いたします。それと三つ目のところでございますが、言い切っている文章が、これまでの招致ファイルでしたが、第一版ではちょっとやわらかくなっているというところは、最初の御質問と同じようなところで、今、具体的にどういう取組ができるかというところを検討しているところで、確定次第、明確に記載していきたいと思っております。

- 髙座長　ありがとうございました。それじゃあ、藤野委員。

- 藤野委員　ありがとうございます。一つ目は、全体のスケジュールの中で今回どういう位置づけにあるのかを、もうちょっと明確にしてほしくて。我々、任期は確か2020年まであるんですけれども。その中で、今回この計画がどういう位置づけにあるという長期の中の位置づけと、それからパブコメが今度あるんですよね。その後、パブコメを受けて、我々また意見が言えるのか言えないのかだったりとか。その辺、ちょっともう一回。今日の宿題はどこまでなのかというところは、後で教えてください。
2点目は、この本体と言ったらいいのか、この資料番号何でしたっけ、分厚いやつで10ページ目の「気候変動(ローカーボンマネジメント)」と書いていただいているんですけれども。本体を見るとローカーボンという言葉はもう無くなっていて、最後は脱炭素に向けた礎ですか。その言葉はいいなと思うんですが、ここだけローカーボンが残っているので。脱炭素に向けたマネジメントなのかちょっとわかりませんけれども、ちょっとそこは文言を変えられたらどうかなと思います。
あとすごくしようもない話で20ページ目で、オの輸送の対策なんですけど。雰囲気的にオ-1が自動車で、オ-2が公共交通機関なんですけど。公共交通機関を先に回したほうが、何となく雰囲気がいいかなという、しようもない話なんですが。公共交通機関で輸送負荷を

減らすというか、CO2負荷を減らすことが多分大事なので。そっちを優先にして、次に自動車なりほかのやつという順番もあるのかなと思いました。
あと43ページ目、44ページ目のところに、実はこの委員会の位置づけっぽいことも書いていただいていて。我々が、特に44ページ目のところは、こういうDGができて議論を深めたと書いていただいていて、参考になっていたらありがたいんですけれども。一方で、よくこういった類の委員会って、委員が果たせる責任というか範囲というのも、ある意味限られている場合もあって。与えられている宿題に対して、我々はコメントを言っているわけで。全体まで責任を持っているのかどうかというところは、ちょっと責任を我々は持たないといけないんでしたっけ。
どういうことかというと、やっぱり委員会で発言していることだったりとか、そういったことに基づいて計画が反映されている、されてないというのは後世の人がそれは判断すればいい話なんですけれども。単純に議論を深めたと言われちゃうと、何かもしもほかの人がこれを見て、深まってないと思ったときに我々の責任になるのはどうなのかなという、すみません、しようもない話ですけれども。そういう意味で、せっかく例えばほかの資料で、調達ワーキンググループの前回の資料とか、結構丁寧に議事録をつくってありますけれども。やっぱりこういったものが公開されない限り、深まったか深まってないかを判断できないと思いますので。その点は、是非善処いただけたらと思います。

- 髙座長　ありがとうございました。最初に御指摘いただいた、全体のスケジュールについて、説明いただけますか。パブコメいただいた後、再度、ここで意見を言えるのかということです。

- 事務局　この1年ということで言えば、パブリックコメントを8月にやって、それを受けて各種ワーキング、ディスカッショングループ、委員会という形で開かせていただいて、それをもって今度は組織委員会の中の経営会議、理事会にかけた上でIOCに提出するという形で考えております。
先生方、皆さんお忙しいので、場合によっては個別にお伺いして、それぞれの表現について御相談させていただければと考えております。この運営計画はこれで完成、終わりということではなくて、来年につきましては定量的な話を盛り込んだバージョンにしていきたいと考えておりますので、来年も継続してやらせていただきたいと考えております。
それ以降については、もともとお願いしたときに、大会までずっと関わっていただきたいということでお願いしております。こちら、具体的にじゃあ第二版ができた後どうしていくかというところは、まだ組織委員会の中でも決まっているところではないのですが、案としてあるのは、この計画ができた後のフォローアップの作業を、このディスカッショングループの場を活用できないかなと考えております。そういった形で今後とも関わっていただければと考えております。
それから、ローカーボンの言葉が本文の中からなくなっているということですけれども。この点については、個別にどういう表現にしていくのがベストなのか御相談させてください。
それから自動車の話と公共交通の話、御指摘を踏まえて組織委員会の中で検討させていた

だきます。

- 髙座長　ちょっと確認ですけど、先ほどのローカーボンという言葉の問題というのは「最初に出ただけで、あとは使われてない」という御指摘だと思います。
- 藤野委員　なので、名前を変えたらどうかという提案です。
- 髙座長　表現をもう一度検討してもらいたいということですね。
- 藤野委員　脱炭素に向けたマネジメントとかですね、例えば脱炭素。
- 田中持続可能性部長　表現の見直しを検討いたします。最後の質問の中で、責任の話がありましたが、この44ページのところの「議論を深めた」という記述は、表現について私たちのほうで検討していきたいと思います。ありがとうございます。
- 藤野委員　第二版って、スケジュールって決まっているんでしたっけ。
- 事務局　今、考えているのは、来年12月を目標に発表していくということで、その過程のところはすみません、まだきちんと線は引けていないというところでございます。ただ、今回と同じように途中、途中でこういった会議体を開くのはもちろん、パブリックコメントを実施する必要はあるだろうと考えております。
- 藤野委員　わかりました。ありがとうございます。
- 髙座長　それじゃあ、小西委員。
- 小西委員　ありがとうございます。ちょっと重なるんですけれども、4点。
  まず、やはり藤野さんと枝廣さんと一緒で、数値目標、今ざっと読ませていただいたんですけれども。これ、どのように来年出すということが明記されているのかというのは、この文章からは今、全然読み取れなかったので。今から明記されるのかと思うんですけれども。日本の場合、いつもこれで見ている限りにおいては、いつものパターンで技術でボトムアップで積み上げてできる範囲でということが、どうしてもここからは見えてしまうので。やはり最初にビジョンを持って、そこに向かって、たとえ達成できないかもしれないけれどもやっていく。ロンドンも本当に目標、ローカーボンで幾つも出して、これは達成できませんでした、これは達成できましたというふうにやっていって。達成できないものは、達成できない理由はというような形でいいと思うんです。ですので、やはり目標がきちっとこれからビジョンとして持つんだよということが、かなりはっきり明記されるためには、まだ数値は入らないんだけれども、こういう形で持つんだという、事前に説明に来てくださったときにお見せいただいたような、例えば四角で囲んだ通常の排出量に比べて丸丸％とか、そういった形でもいいので、これからはっきり出すんだよということを、これ見たらすぐわかるって形にしていただけたらなと思っております。その際に、やっぱり排出量の算定が、まだ非常にバウンダリーとかも決まっていないし、しかもこれからまだ算定ができないものもあるということで、難しいということは理解しているんですけれども。それをどこが主体となって排出量を算定するのかということをお聞きしたいと思います。

プラス、今いろいろ省エネルギーですとか再生可能エネルギーで、自動車とかもう既にここにいろいろ書いてくださっているんですけれども。これこそ、是非低炭素ワーキンググループでまず話し合わせていただいて。排出量の算定も、バウンダリーも、是非一緒に議論させていただいて、我々を使っていただきたいなと思っております。その上で今、年末までに時間がないとおっしゃいますけど、まだ7月ですので。まだまだ深まると思うんです。ですので、是非今まで低炭素ワーキンググループはオフセット以来開かれていないので、それをお願いしたいと思います。

あともう一つが、やっぱりプロセスです。これは先ほどからNGOとか、あるいはいろんな経済界とか、いろんな参加主体に積極的に参加していただきたいということ。それは、やはりこういったオフセットとかでも地域の方に参加していただいて、観客の排出量をオフセットするのに地域からの寄附とか、いろんな形が考えられると思うんです。逆に言えば、そういったローカーボンの具体的な話が進んでこそ、具体的な参加の形というものもアクションとして見えてくると思いますので。

是非具体的なプロセスを進めるためにも、外部の主体から見て、このディスカッショングループを含めて全てのプロセスにおいて何が話し合われているかもわからないということを、すごく外部からも言われていると思います。まず第一歩、参加を促す前には、透明性がすごく大事だと思いますので。今一度、やはりこのディスカッショングループも含めた資料の公開、政府の審議会も全て公開されていますので、そういった形での公開を是非進めていただきたいなと思っております。よろしくお願いいたします。

- 髙座長　今いただいた御意見は三つです。数値目標の件、それから誰が、例えばCO2であれば、誰が算定するのかということ、そして、プロセスの問題ですね。第3の意見は、これまでもずっと言われております。できるだけ見える化、透明化を進めてほしいという御意見ですね。

- 事務局　御意見ありがとうございます。まず、最初にいただきましたCO2の排出量の算定のところなんですけれども、運営計画では9ページのところに、この目標に関する部分、今後書き込みますということは入れさせていただきました。その上で、ちょっとお話をさせていただければと思います。

先ほど御質問の中に、このCO2の排出量算定の主体はどこかというお話があったかと思います。これにつきましては、もちろん私ども組織委員会で算定をさせていただきたいと思っております。と申しますのが、もともとこのバウンダリー含めた算定に関しましては、もちろん東京2020大会全体でいえば、国、東京都さんの部分もございますが、組織委員会の部分も多々ございます。そういった全体を見られるのは、もちろん組織委員会になりますので。関係者の皆さんに御協力をいただきながら、数字を出していきたいと思っております。とは言いながらも、まだ大会に向けて4年前ということで、輸送であったり、建設であったり、食を提供する部隊であったり、それぞれの計画なり中身が、まだまだこれから詰めるという段階でございまして。やはり算定の基礎となる、そのそれぞれの部分をどうやっていくのかというのが明らかになってないので、現状では、我々はそういったところを見ながら算定を進めたいと思っております。今、7月ということで、12月に向けてまだ確か

にお時間はあるのですけれども、そういったところの流れとリンクしながらやっていきたいと思っています。先生のおっしゃられるようなタイミングでは、ちょっと御希望に沿えない部分はあるかもしれないのですが、私どももなるべく事業の進み具合を見ながら、算定には入っていきたいと思っておりますので。また改めて、その辺は御相談させていただければと思います。

- 田中持続可能性部長　3点目の透明性の話でございますが、先生方から何度も言われていることでございます。これについては、我々組織委員会の中でもいろいろ議論いたしまして、もともとは議論の要旨だけを出していましたが、最近では全て公開にしているとか、あるいは要旨もしっかりとした議事録というような形で出してきております。このディスカッショングループでも、具体的にどういうことが議論なされてきたかということは、しっかりと公表していきたいと思っております。

- 髙座長　ありがとうございます。先ほどいただいた意見の中で、小西委員が強調したかったのは数値を早く出してほしいということだけではなく、数値を来年度に向かって出すという、その姿勢を明確に示してほしいことですね。
それから算定のプロセス、誰がやるのかというのは非常に難しいかと思いますが。ありがたいことにワーキンググループが積極的に汗をかきますと言ってくださっているので、これを積極的に利用していただければと思います。
あとプロセスのところ、難しい課題もあるでしょうが、先ほど藤野委員からもいただきました、議論がどのように深まったとか、誰がどういう発言をしたかなどを見えるようにしてもらいたい。自由な議論を促すという意味で、確かに問題もあろうかと思いますが、もう少し情報を出す方向で、事務局として議論を進めていただければ幸いです。よろしくお願いいたします。
それから、他にございますでしょうか。森口委員。

- 森口委員　2点、大きく分けて申し上げたいと思います。
1点目は資料の3-2で見ていただく方がわかりやすいかと思います。3-2の8枚目のスライド、資源管理でございます。先ほど低炭素の方は、やや後ろ向きという話があったんですが。資源管理、割に前向きにしっかり攻めて書いていただいている。特にG7などもありましたので、それを前向きに非常に書いていただいていて、結構だなと私もそれに目を奪われていたんですが。ちょっと攻め上がり過ぎて、守りがおろそかになっていないかなということは、私ちょっと見落としていて。これ大変、私自身の反省でもあります。
8ページでいいますと、2に省資源・廃棄物の発生抑制、これ3Rでいうと、リデュースですね。3番に再使用・再生利用と書いて、これはリユースとリサイクル。4番に熱回収・エネルギー回収、これはいわゆるエナジーリカバリーなんですが。その廃棄物処理の階層構造としては5段階で、一番大事なのは、一番最後の適正処理・適正処分というのがあるわけです。これについては、3-1でいいますと、28ページの(3)-2-3の熱回収・エネルギー回収というところの末尾に、その残渣など埋め立て処分が必要な廃棄物については、適宜適切な方法により最終処分と書いてあるので、書かれていると言えば書かれているんですが。やはりここに何かつけ足しのように書くのではなくて、これはやっぱり項目をしっかり立て

ていただいて、適正処理はしっかりやりますということを、是非書いていただきたいんです。最近リサイクルは非常に進んでおりますが、一方で不正行為などもあって。これは資源管理のワーキングでも申し上げたんですが、廃棄処理というところで不適切な事案などが出てまいりますと、ここで言っている議論が吹っ飛んでしまうような話がありますので。それは、明確に書いていただいた方がいいのではないかなと思います。
2点目は2-5で、これは多くの委員がおっしゃっているので、もう本当に繰り返しにしかならないんですが。ただ、でもちょっと事務局からのお答えが、ちょっとまだ私、不満なものですから、もう一度申し上げます。というのは今回、議事録詳細版というのを資料2につけていただいていて。その2ページに、私の発言の最後の方に、早い段階で持続可能性DGでも公開性をもっと高めなくてよいのかという話で、言い続けてこなかったことは私自身の反省でもありますので、今日も言い続けるわけです。それで、多くの方々がおっしゃっているんですが、小西委員がおっしゃったように、やはりしっかりとこういう議事録詳細版というレベルで公表する、しかも誰が何を言ったかという、これは藤野委員がおっしゃった委員の責任ということにも関係してくるわけですけども。それがある種、この種の委員会のデフォルトになっていると思います。今日も冒頭にメディアいらっしゃって、メディア退席してくださいとおっしゃったんですが。カメラ撮りは冒頭だけだけど、メモ取材はされるというのは、これはほとんどスタンダードだと思います。私、関わりました原子力規制委員会のある検討チームなんかですと、もうインターネット中継ですので、あいつはここで何を言ったと、もうリアルタイムで返ってくるような。そういうある種の緊張感の中で、委員もやはり責任を持って発言をしたいと思っておりますので、是非そのような形でお願いしたいと。なかなかそこまではいけていないと、こういうのは田中部長からのお答えだったのです。なぜ、じゃあそれができないのかとか、それはやっぱり明確にしていただきたいと思いますし、是非少なくとも今日こういう議論があったということについては、概要版であったとしても、この持続可能性の議論に関しての公開を求める声が非常に多くの委員から強い意見があったということ自身を、議事録にとどめていただきたいと思います。ちょっとここまで具体的に申し上げないと、またうやむやになるといけませんので。極めて具体的なお願いでございます。もし議事録にとどめることもできないということがあれば、それはそれでまた、そのことも我々としては受け止めなきゃいけないかなと思いますけども。ちょっとその点、重ねてお願いをしたいと思います。ちょっと長くなりますけども、最近、非公開のいろんな会議の、これが非公開でこんなことが議論されていたということがリークされて新聞記事になる例がかなりあります、私の知る限りでは。この話でなくて別の話題ではあるんですが、結果的にそれをやって、そこの議論がとまってしまうようなところもありますので。公開することによる何らかのリスクがあって、今されてないのかもしれませんけど、公開しないということ自身が、リスクとして高まっているということの認識は、是非とも受け止めていただいて、そのことについては、是非早急に対応をお願いしたいと思います。

- 髙座長　御意見ありがとうございました。2点いただいて、1点目は廃棄物の適正処理・処分について項目を立てるべきだという点、これは検討させていただきます。

もう1点は、情報の開示です。先ほども指摘をいただきましたが、事務局として悩んでおられる部分があるのであれば、こういう理由があって、今の段階ではいっぺんに見える化するのは難しい、ここまでだったらできるというような説明を、今日じゃなくて結構ですから、次回にでも説明してもらえませんか。多分、確定していないような内容が、あたかも確定したように世の中に出回ってしまうことを懸念されておられるんじゃないかと、私は拝察しますが。今、お答えしますか。

- 西中大会準備運営第一局次長　森口先生からありました話で、ちゃんと議事録にテイクノートしておいてくれと言われたことにつきましては、テイクノートさせていただきます。それと公開につきましては、我々もそういう方向でやりたい、いや、やらなきゃいけないと思っております。これについては、ほかの委員会の関係を整理しなきゃいけないというのがまず1点。もう1点、こと今回につきましては、一部の資料が国の関係省庁とも、それから東京都との間もまだ調整途上のものでございまして、事務局ベースとして整理されたものではないんです。時間との関係もあって、そういった状態のものでもこういう場で先生方のほうから御議論をいただきたいということもあって、今日、開催させていただいております。これが、もし国の省庁とか東京都との間で、一応、事務局ベースとしてはオーソライズできましたというものであれば、そこは何ら気にすることなく公開ということもできたのかなと思っているところでございます。ですので、今回に関しては公開というのは避けさせていただいたという点については、御説明をさせていただきたいと思います。他の委員会との関係は、改めて組織委員会の中でも整理をいたしまして、なるべく公開させていただくという方向で考えさせていただきたいと思います。
- 髙座長　ありがとうございました。森口委員。
- 森口委員　くどいんですが、今おっしゃっていることはよくわかります。事務局として調整ができていないからという話があるんですが、これは、実は関わっているいろんな国の審議会なんかでも、ままそういうことがありまして。一回日程設定をしても、事務局としては調整がつかなかったから延期するという、そういうこともよく我々、経験しております。それは公開の審議会だから、それはできない。
それよりは確かにそういうことで言えば、時間が限られている中でこういうのを開いていただくということはいいんですけども。そうだとすると、逆にそのセットしたものに関して、我々は何か意見を言って、じゃあもうセット済みなんだけども、それに対して我々が言った意見というのは反映していただけるんだろうかという逆の心配が出てくるわけです。ですから、調整をしてから開くということだとすると、それは我々が言ったことについては聞いていただけるんだろうかと。それはある意味で、事務局の中でしっかりセットをするということに、やはり重きを置いておられて。ここで開いて、ガス抜き的に意見は聞くけれども、結局それは動かせないということであれば、それはやっぱり議論の順番として違うんではないかなという気もいたしますので。その辺りも含めて事務局でセットできていないからということに関しても、それはちょっと私自身もそこについては少し承服しかねるところもあるということは申し上げておきたいと思います。

- 西中大会準備運営第一局次長　誤解のないように申し上げておきますけれども、事務局が設定したものにつきまして、それは変えるつもりはありませんとか、そういうことは毛頭ございません。そういった意味では、ラフなパターンでまず御意見を、お伺いをいろいろさせていただいて、それを踏まえて事務局で整理して、関係するところと調整させていただいた上で、前回の議論を踏まえてこういうふうになっていますけれども、これでどうでしょうかという形でお示しをさせていただいて、深めていくものかなと思ってございます。繰り返しになりますけど、今回のこの3-1というのは、まだ我々の中でも作業途上のものというものであったということで御理解をいただければと思います。
- 髙座長　ありがとうございます。なかなか結論が出ませんね。最終的に調整できたものについて公表するのではなく、「まだ調整途中です」という但し書きをつけて開示する、何かそういうスタンスで考えていただけませんでしょうか。当然相手がありますので、国とそれから東京都のほうにも了解をいただく必要がありますが、「まだ調整途中」と明記して公表するのであれば、この問題は解決できるんじゃないでしょうか。是非検討してください。
- 西中大会準備運営第一局次長　今日そういう御意見を多くの先生方からいただいたということは、しっかり議事録にも残させていただきたいと思います。
- 髙座長　藤野委員、どうぞ。
- 藤野委員　そういう点では、逆に調整できてないというところは、論点がまだあるのかなと思っていまして。今回委員だけじゃなくて、せっかく都も国の方もいらっしゃるので、共有できる範囲でいいんですけれども、どういう論点がまだ残されているか。つまり、この資料3-1は運営計画、今度IOCに出すもので、是非いいものをつくりたいというのは、これはみんなの気持ちだと思うんですが。それに向けて過去1年、2年とか意見をずっと我々も言ってきて、それがどう反映されたり反映されなかったりとかまでは我々も十分にはチェックできてなかったりもする中で、国と都との間でのまだ論点があるならば、そこも参考にしながら我々また今後検討していく上で情報をいただけたらと思うんですけど、いかがですか。
- 髙座長　大変貴重な御意見をいただきました。ただ、今日は開示について、あるいは情報発信について、どういうスタンスでいくかということを議論する場ではないので。
- 藤野委員　じゃなくて、論点でこの3-1について何でしょう、都なり国でまだ議論すべきところがあるんだったら委員として頭に入れておいたほうが、今後、低炭素なら低炭素なりで是非議論すべきというところがあれば、是非言っていただいた方が私としては作業しやすい。
- 髙座長　では、主なものだけ簡単に御発言いただけますか。
- 岩川企画官　国の立場でいろいろ申し上げたこともありますが、さっき事務局から御発言いただいた目標設定とか、基本的にはあの御発言に集約されるのかなと思います。我々として、何か後ろ向きなことを申し上げているわけではなくて、行政として現時点でまだ議

論が深まってない部分があるというのは申し上げました。そういう中で、現在の案になっているんだと思います。特に、外に出すときに後ろ向きに捉えられないような工夫というのは必要かなというのを各委員がおっしゃっていることについては我々も賛同するところであります。ただ、行政の立場からすると、現時点ではそこまでまだ議論は深まってないんじゃないかと申し上げたものは確かにございます。

- 髙座長　どうぞ。
- 鈴木政策調整担当部長　東京都の環境局でございます。藤野委員が今おっしゃったように、検討すべき論点というのはたくさんあるんです。むしろ、もう1年ほど議論しているのに、何も具体的な議論に入っていけないということの方が問題だと思っておりまして。我々も早くそういう具体的な施策について議論しましょうということを申し上げてきているんですけども、なかなか深まらないと。これは一つには、スケジュールが変わっていくからです。最初は去年の12月までに策定すると言っていた。ところがフレームワークを出すという話になってパブコメをした。パブコメをしたから、次の段階には当然それを踏まえたものが出るだろうと思っていたら、またパブコメの意見は反映していないと。今度12月につくるものが最終版かというと、そうじゃなくて第一版だということになった。来年に12月の最終版に反映をすると。この決め方自体は、私はよろしいかと。決め方といいますかスケジュール、今回発表があったスケジュールについてはいいと思っているんですけども、非常に疲弊するわけです。例えば去年の12月までにつくらなきゃいけないという話だったので、我々はもっと早く具体的な施策をやらなきゃと思っていろいろ申し出る。それから委員の先生方も具体的な話を、意見を出されている。でもそれは反映されない。だからスケジュールは変わるのはしようがないと思うんですけど、それは議論の前提ですからきっちりと我々に教えてほしいというのがございます。やはり世間とのコミュニケーションという意味でも、いつまでに何をするのかというのがわからないと。例えば前回パブコメを出した方々も、出したんだから議論をいただいているんだろうと思っているわけです。ところが今回、これでまた次パブコメやるときに何も反映されてないとなると、非常に不満に思うわけです。ですから、そういうことで不満が重なっちゃうんです、コミュニケーションがうまくいってないと。ですから、そこはコミュニケーションをちゃんととってほしいというのが、一つはございます。
  それからもう一つ、藤野委員がおっしゃった論点ということで申し上げますと、例えば低炭素分野で言えば、まさにオフセットをどういうふうにやっていくのかというようなことを低炭素ワーキングでも少し話題に出ました。そういう話がございますし、あるいは大会施設の省エネ、再エネ、どういう工夫をしていくのかと。今回は、この本編の中にCASBEE、Sを目指すというようなことも書かれてはいるわけですけれども、論点はさらに詰めるべきところがもっとございますし。
  例えば、資源循環という部分でも、いろいろな業界さんがいろんな提案をされています。例えば製紙業界さんは、オリンピックで紙に関するリサイクルを、こういう形で意欲的にやりたいというような御意見もいただいているんだけれども、そういう話もまだ議論されていない。何にせよ、論点はいろいろあるんですけど、とにかく議論されてないというこ

とでございます。ですから今年の12月までに、どれだけ具体的な項目について入れ込めるかと、もちろん結論が出ないにしてもこういうことを議論した、こういうことが論点だと思っているというようなことを、やっぱり入れていかないとだめなのかなというふうに思っています。
それとすみません、長くなりますがもう1点だけ。もう一つは、バウンダリーといいますか、誰が何をやるのかというお話でございます。例えば、先ほど出た自然の緑などの話については、大半が多分あれは東京都が、あるいは千葉県や他の県が取組むことなんだろうと思うんです。それをバウンダリーといいますか、これは組織委員会がやることじゃないから運営計画に書くべきじゃないとは申し上げません。この運営計画は、全てのデリバリーパートナーが取組むことを一つにまとめておくという意味で、それは書くべきだとは思っていますが。ただ、誰が取組むのかというようなことを、ある程度言及したほうがいいんじゃないかと思います。今回のこの取組の、計画全体の位置づけについて、この計画を尊重して組織委員会も東京都も国も取組むというふうに書かれているんですけども。確かに尊重してというような言い方、東京都や国にとっては特にそうなんですが、そういう言い方になるんですけれども、組織委員会もそれでいいのかというのは、ちょっと思うんです。誰の計画なのかと。ですから表記の仕方として難しいところがあるのはわかるんですが、全体の中でもそれぞれの施策に関して誰が取組むのかということを少しずつ出しながら書かないと、運営計画ですから、そういうものにならないんじゃないかなと思います。

- 髙座長　ありがとうございました。多分、あまり単純にまとめちゃいけないかと思います。やはり一番懸念されるのは、我々は委員としてかなり理想的なことは言える、チャレンジングな提案はできると思いますが、事務局が懸念されておられるのは、それを具体的に誰が実行するのか。例えば業界もありますし、デリバリーパートナーもありますし、その人たちが実際にできるかどうかということを確認しないで、勝手にどんどん情報が出すと、事務局が批判を受けることだってあり得ると思います。そんなことで、事務局は悩んでおられると思います。これを解決する方法は、結局、「実現可能性はないかもしれないけれども、こういう議論がなされた」という事実だけを開示することだと思います。これについては、機会を改めて、議論をさせていただくということでよろしいですか。
では、第2番目の議題に入ります。持続可能性に配慮した調達コードについて、事務局から御説明お願いいたします。

- 事務局　資料2(第5回議事録)を紹介。資料4-1(持続可能性に配慮した木材の調達基準)を使って、木材の調達基準について説明。資料4-2(「持続可能性に配慮した調達コード」の概要について(案))を使って、調達コードの全体像について説明。資料4-3(「持続可能性に配慮した調達コード」の検討スケジュールについて(案))を使って、今後の検討スケジュールについて説明。

- 髙座長　ありがとうございます。これは報告事項ということですので、何かどうしても御発言したいということであれば、お受けします。どうぞ。3人、こちらから順番にお願いします。崎田委員から。

- 崎田副座長　私、資料を出させていただいたので、なぜこういうのを出させていただいたか、一言よろしいでしょうか。

  私はNPO持続可能な社会をつくる元気ネットという団体を運営しておりますけれども、ここで持続可能なオリンピック・パラリンピックに大変関心を持っております。具体的なことを、勉強会を実施して提案をできないかということで、昨年来から実施しておりますが、ちょうど今年の1月から、3Rの具体化と調達に関して勉強会を続けております。その中の食料調達に関して打合会を4回ほどやりまして、その後先日、6月10日にきちんといろんな方に来ていただいた会合をやりました。そこで出た骨子のところだけでも情報提供させていただき、この後、調達ワーキングで食材の検討が始まると、今日の資料にも書いてありますので、資料を活用していただければありがたいと思って、委員の一人として書類をつくってまいりました。

  ページ開けていただいて、これはビジョンのところですが、ちょうど3ページ目です。東京2020で考える、そもそも必要な食料への配慮とは何かとそもそものところをみんなで考えたわけです。全般への配慮、食品安全、衛生管理、宗教や各国の文化対応、全ての段階での食品ロス削減と循環利用。そして下の左に書いてあるのが、ロンドンのオリンピックのときに、食に関してはどういう項目重視したかという内容です。地元産、持続可能な農林漁業、オーガニック、季節の野菜、フェアトレード、栄養バランスとあります。右側は日本らしい追加項目ではどんなものが必要かという点で、災害復興とか和食メニューでおもてなし、中小事業者さんへの配慮、こういうところが大事なんではないかという声が出ました。

  次のページを見ていただければ、ではこういうことを考えると、どのような食の調達指針という項目が大事なんだろうかということで、この4ページに丸1から丸10まで書かせていただきました。これはいろいろな、こういうことを担保しながら考えていくのがいいんではないかという項目として出してまいりました。きっと日本では1番の食品のトレサビリティーとか、6番の持続可能な農林漁業、この辺はこれから皆さんで議論していただく大事なところかと思っております。こういう10の項目を考えると、その次の5ページのところで、それを持続可能性の分野で分けると考えれば、全般の話、環境、社会、経済、こういう視点で交通整理ができるのではないかと考えました。

  次のページ開けていただいて、一覧表みたいなのがあるんですけれども。食の国際認証マークに関する配慮項目の特徴ということで、三つだけ今、書かせていただきました。何でこの三つかというのは、レッドトラクターとMSC、フェアトレードですが、この三つがロンドンオリンピックのときに重視されたものです。基本にしたのがレッドトラクターで、国内のトレサビリティーが効いているかという英国国内マークです。その後、よりよい調達を海外からもというときに、MSCやフェアトレードが非常に評価されたということを伺っておりますので。その三つを参考に、先ほどの項目で配慮状況をチェックさせていただきました。

  最後の下のページなんですが、こういう食の制度と国際標準の制度を活用すると、どう信頼が担保されるのかというところを、まとめさせていただきました。こういうようなことを踏まえて、今、最後のページにあるように市民、事業者、行政の方のプラットホームづ

くりを進め、いろいろな提案をつくり、考えていける場をつくれればと取り組んでいます。
最後に、A3のこの一覧表を見ていただければと思います。こういうような制度ありきで話してきたわけではありませんが、最終的に、では今日本にどういうような制度があるのか、いわゆる食の安全性とか、いろんなものを評価する制度があるのかということでまとめました。上の欄に制度を書かせていただき、その特徴を書きました。左側を見ていただければ、環境、人権、労働、経済、いわゆる環境、社会、経済の項目にあわせて、一覧表をつくってみました。
一番上のところを見ていただければ、列の3番のところは農産物、ここから始まっていますが。GLOBAL GAP、次が日本のGAP、日本の中の認証制度があって、列の8番目、この食品安全マネジメント協会は、これは2016年にできたばかりの協会なんですが、安全性のところを考えた新しい制度です。その次、水産物でGSSI、全体のところの評価の話ですが。その後MSC認証、もう一つの認証という形で、あとは全般のISOなど。こういうふうないろんな制度が、具体的には持続可能などんなところを評価するのかというのを、見ていただければと思います。やはり全般や環境とか経済のところは結構チェック項目あるんですが、社会のところを網羅するような制度はまだまだ少ないのかなと思います。
では日本の中で今回のオリンピックはどういうふうなところを大事にして調達基準をつくるのか。日本の国内の事業者さんも、そして世界からも評価されるという、そういうようなことができるいうことを、是非検討していただく素材みたいなことで活用いただければありがたいと思います。よろしくお願いいたします。

- 髙座長　ありがとうございます。よろしいですか、はい。

- 枝廣委員　調達のワーキングに入っていないので一言だけ、シンプルな質問です。
特にその食材の場合、崎田さんが非常にわかりやすくまとめていただいている、これすごい資料だなと思って拝見しています。日本であまり重視されていないけれど、世界では、もうかなり大切になっているという、そういうギャップを埋めるようなことをこの東京オリンピックの調達コードでしていただきたいなと思っています。具体的に一つだけ挙げると、畜産に関するアニマルウェルフェアです。日本ではほとんど意識されていませんが、今アメリカなどでは投資リスクになるぐらい大きな扱いになっています。動物福祉というふうに崎田さんの資料にも出していただいていますが、日本の国内だけ見るのではなく、世界標準に近づく、もしくはその先を行くような形で是非と思っています。
質問をさせていただきたかったのは、調達コードは非常に業界の方々の関心が高いので、何について調達コードはできるのかということをよく聞かれたりします。木材についてはできました。食材について農・畜・水産はこれからつくります。恐らく紙についてもつくります。紙その他というところのその他を、もしわかっているものがあれば知りたいですし、紙でお終いのつもりだったらそれも知っておきたいので、その事実確認の質問です。

- 髙座長　簡単にお願いします。

- 事務局　崎田委員からの御提出のあった資料については、調達ワーキンググループの中でも委員の方々に共有して、今後の検討の参考にさせていただきたいと思います。ありがと

うございました。
枝廣委員からの御意見については、世界との意識とのギャップも配慮しながら検討してまいります。動物福祉なんかも、畜産物の検討をするときには当然配慮していくことになると思います。ただ、委員からは世界標準というお話もありましたけれども、何が世界標準なのかというところは、またいろいろ議論があると思いますので。そういったところで、日本の中でもいろいろ取組んでいることもございますし。そういったところを十分考えながら検討してまいりたいと思います。
調達コードの対象範囲についての御質問ですが、これは基本原則にも書いていますが、基本的には組織委員会が調達するもの、要は組織委員会がお金を出して買うもの、あるいは供給、提供を受けるサービス。あとこの前発売されましたけど、ライセンスのロゴがついた商品といったものが対象になります。これらについては、これからつくる調達コードが適用されます。あと国や都に対しても、これを働きかけるということにしておりますが。これは、それぞれ国や都で、尊重していただくというか。他方で、それぞれ調達するもの、あるいは整備する施設については、いろいろ数量も品質も、納期もそれぞれ皆さん違いがありますので。そこは、それぞれあと適用される会計のルールですとか、そういったそれぞれの事情がありますので。そういったものを踏まえて、それぞれ御判断いただくというふうに考えております。

- 髙座長　まだ細かいものは決まってないということです。
- 事務局　もう1点。紙、その他と書いてある個別の基準については、今、ワーキングの中で御意見出ているのは紙と、あとはパームオイルといったものが御意見として出ております。そういったものについて、あとそれ以外のものについてもワーキンググループの中で御意見があれば検討していくということでございます。紙だけに、今限っているわけではございません。
- 髙座長　ありがとうございます。もう遠慮していただいていいですか。またワーキンググループを利用して頂けませんか。どうしてもですか。どうぞ。
- 小西委員　低炭素も是非こういうふうにスケジュールを出していただいてやっていただきたいなという一言です。
- 髙座長　低炭素のワーキンググループのところですね。はい、是非検討お願いいたします。
- それでは、時間管理がうまくいっておりませんで、最後の事項に行かせてもらいます。20分しか残っておりませんけども、アクション＆レガシーのところの説明お願いいたします。
- 佐々木アクション＆レガシー担当部長　資料5(アクション＆レガシープラン(街づくり・持続可能性)について)を使って、アクション＆レガシープラン及び東京2020参画プログラム(仮称)、街づくり・持続可能性に関する認証、今後の展開について説明。
- 髙座長　今、アクション＆レガシープラン、むしろプランというよりも、これを具体的に推進していくために参画プログラムの御提案がございました。これに関しまして御質問、それから御意見ございましたら、よろしくお願いいたします。崎田委員。

- 崎田副座長　ありがとうございます。最後のところは、今見たばかりなので、適切にお話をすることはできないんですが。自治体などへの理解というのは、とにかく今、自治体の方は地方創生、やはり自分たちの地域の個性とか活力を使って、いかに社会に発信するかということに大変関心を持っておられますので。そういうふうな皆さんの地域の良さをきちんと活かし、世界からの方をおもてなしするなり、そこにつながるようなことを、うまく考えてほしいというふうにお話しすれば、皆さんうまく考えていただけるんではないか。ですから、その辺きちんと皆さんの地域が、より元気に強くなっていただき、その日本の良さが伝わるようなということが伝わればいいのではないかと素直に思いました。
  それで2点ほど申し上げたいんですが。いろいろな企画が出てきたときに、それは審査させていただいて、PDCAサイクル回すという話がありましたけど。本当に質のいいイベントなり行事なりやっていただくというのが大事だと思いますので、そこに質がちゃんと担保できているかというのをチェックするとか、そういう機能をしっかり入れておかないといけないという感じがします。なぜ申し上げるかというと、例えばそのイベントの場合、環境配慮型のイベントというのは、かなり電気の使用量に関してもできるだけ低くするとか、皆さん努力したり。ゴミも出さないようにするとか、リユースカップを使うとか、結構今いろいろな地域の行事というのは苦労したりしているんですけれども。ある程度そういうことも配慮するよう仕様書というか、企画書の中に必ずおさえていただく項目を入れるとか。その辺の企画提案を受けるときの仕掛けを入れて、質の高い提案が出てくるように仕掛けていただければありがたいという感じがいたしました。
  もう一つなんですが。国などの提案と、もう一つNGOなども提案できるというところがあって、いろいろなところでみんなで輪を広げていければなと思うんですが。NGOとか、本当に非営利団体の場合、アイデアは浮かんでも、スポンサーをどう集めようかとか、助成金をどこから持ってこようか、実はそれがすごく大変です。そういう意味でも、環境NGOとか非営利組織の、環境保全型のプロジェクトに関して社会が支援するということも大事な話なんだということを、やはりどこかできちんと位置づけていただくということも大事かと、これを拝見しながら思いました。よろしくお願いします。

- 髙座長　今、崎田委員が発言した内容とかぶってくるかと思いますが。先ほどのカードで6ページ目のカードですか、それから7ページ目もそうです。応援プログラムに認証を与えるといったときに、ここに非営利団体等と書いています。企業でも、何でしょうか、公共性を考えて、例えばNGOなんかと組んでいろんな社会貢献活動をやっています。そういった運動体というのは、応援プログラムの対象にはならないのですか。

- 佐々木アクション＆レガシー担当部長　非スポンサーがメセナ活動をするようなことということの理解でございますね。

- 髙座長　はい。

- 佐々木アクション＆レガシー担当部長　そこは、どういうふうに取り込ませていただくか検討中というところでございます。

- 髙座長　そういう質問をするのは、NGOさんだけでは、なかなか財政的に脆弱で、動けない

こともありますので。そこを確認しました。

- 中村企画財務局長　そこは非常に悩みの多いところでございまして。我々組織委員会がつくるこのOCOGマーク、NCマークいずれにしましても、スポンサーシップとの関連は非常に大きな一つの条件にならざるを得ないというところがあります。従いまして、そういう非スポンサーの方が表に出るような活動は、これは非営利活動とはなかなかみなせませんで、認証の対象にならないことになります。ただ、一方で、我々は非常に多くの方に参画していただこうという思いを持っておりますので。例えばそういうイベントについては実行委員会方式のように、主催は実行委員会という形式があります。イベントのスポンサーの方は表に出てこないとか。そういう座組みであれば可能であると思います。あるいは大きなイベントであれば、どこかには非スポンサーがあるのかもしれませんけれども、どこかをくくり出していただいて、そこについては一部分ですけれども非スポンサーが関与しない座組みをつくっていただければ、そこに対して認証することで、全体をある程度盛り上げにサポートできるような。そういった知恵を考えていきたいとは思っております。

- 髙座長　ありがとうございます。では、お二人順番に。枝廣委員から。

- 枝廣委員　ありがとうございます。2点あります。
一つは、今のお話も正にそうなのですが、このような認証の制度、仕組みをつくったときに体制をどうするかというのが、やはり一番大事なところになってきます。特に入口と出口の管理です。どういうところが入って、認証を受けるのか。そのときに基準はここに幾つか考え方は書いてありますが、例えばその基準でだめだと言ったときには、そのだめだと言う責任が生じます。「何でうちがだめなんですか」と言われたときに、誰がどういう責任で答えていくかという、そこのところをしっかりつくらないといけないということです。
もう一つは、先ほどのお話のようにスポンサーの関係で、どうしても営利企業にこういったマークが使えないという形になってくるときに、例えば、営利企業がカモフラージュ用のNGOをつくる、もしくはそういうところと組む。だけど実際は、その営利企業の何かをアピールするというのは容易に考えられるわけです。そういったところは、多分最初のスクリーニングのところではチェックできないので、実際どうかということを本当にどうやっているかというのを見て、これは違いますとか、それだったら認証を取り消しますとか、多分、その出口のところもつくっておかないといけないと思います。これは伺った話ですが、ロンドンオリンピックのときは、専用の部隊がいたというふうにも聞いています。組織委員会はとても大変だと思いますが、その辺りを、もし委員会の中でやるとしたら、それなりのマンパワーを必要とするだろうなというのが1点です。
もう1点目は、先ほど御質問いただいた件で、自治体にどう広げるか。それだけではないのですが、例えば一番シンプルな考え方として、ウェブをつくって、日本の全国でこれが広がっている様子が可視化できるような形はどうでしょうか。そうすると、例えば自治体の方からすれば隣の都道府県ではこれだけ出ているのにうちはゼロだよね、やっぱりそれはまずいよねというのは、当然入ってくると思います。NGOや地域でやってらっしゃる方々もそれを見ると、じゃあ自分たちも何かできるかもしれないと。ですので、どういうところ

がどういうプロジェクトで、どういう認証をもらって、どういう活動をしているかというのがリアルタイムに近い形でわかるといいと思います。そうすれば、日本全国にどんどんそれが広がっていく形が出てくると、すごく自分も参加できる。やはり地方に行っていて思うのは、東京オリンピックは東京のことだよねという意識がまだまだあります。地方からでも参加できるし、一緒にできるという、それを見える化していただけるといいかなと思いました。

- 小西委員　なるべく参加・協働を促すという点で、こういったプログラムはとてもいいと思うんですけれども。さっきの崎田さんがおっしゃったことと、ちょっとつながるんですけれども。やっぱりある程度の基準がいるのかなという気がいたします。今、それぞれの認証というんですか、この応援プログラムを五つの分野で、例えばスポーツとか街づくりとか文化とか分けて出されるというイメージだと思うんですけれども。基本的にこの8ページに書かれている適切性、オリパラ憲章、またはオリパラの趣旨に照らして不適切と認められる事業内容を含んでいないところというところで。これから、やっぱりせっかくつくってきた調達コード、木材とか、これから紙とか、食とか、野菜とか、魚とか、いろいろできてくると思うんですけれども。やはりレガシーを残すということが、このオリンピックの一つの大きな目的だと思いますので。こういった応援プログラムに対しても、持続可能性の分野での配慮は必ず、どの五つの分野のものでもマストとして入れるということによって、少なくともそれが実際に工事に関わる業者さんみたいに遵守を求めるところまでいかなくても、せめて読んだというチェックとか。多少緩くなることはあり得るとは思うんですけれども。だけど、それをすることによってせっかくつくった、このオリンピックの調達の考え方というのが広まる契機にもなると思いますので。是非、それは御検討いただきたいと思います。
- 髙座長　森口委員。
- 森口委員　これは質問になるんですけど。枝廣委員がおっしゃった1点目に関連して、これ大体どのぐらいのスケール感でお考えになっているのかなというのを、ちょっと。不勉強で申し訳ないですが、例えばリオとかロンドンで大体どのぐらいの数なのかによって、恐らくそのマネジメントできる深さとか、あるいはどういう形でやっていくのかというのは変わってくると思います。自治体といっても、都道府県であれば47しかありませんけど、市町村ということになると2,000近いということなので。もちろん多くの方に参加いただいたほうがいい一方で、たくさんになればなるほど、やっぱりそこのクオリティをちゃんと担保するということが難しくなると思うので。どういうスケール感なのか、今、もしお考えがあれば教えていただければと思います。
- 中村企画財務局長　ありがとうございます。幾つかの御意見いただきまして。まず、広く参加いただくか、クオリティで絞っていくかというのは、非常に大きな問題でございます。これ以外の委員会でもかなり多く議論をいただきました。ほかの委員会もそうですし、今のところ我々は、あまり入口のところでいいか悪いか絞り込むと、これはかえって動きが広がりにくくなってしまうんではないかと思っておりまして。むしろ、この趣旨に賛同し

ていただければ、なるべく広く認めていこうかと、今我々は思っております。そうやって三角形を大きくすることで、より恐らく広がりも出ますし、上の方にはクオリティの高いものが、当然出てくると思いますので。できれば、そっちの方で行きたいと思っております。

また、枝廣委員がおっしゃったように、これを可視化するというのは非常に大事なことだと思っております。まさに我々、これをPDCAで狙っております。恐らく、この秋からこのプログラムをスタートさせるわけですけれども、最初はやはり東京を中心でありましょうし、スポンサー企業が中心でしょうし、自治体の中でも特に意識の強いところが、まずは出てくるんでしょうけれども。隣のまちでこういうことをやっているとか、隣の県でこういうことをやっているということを見せることで、うちでもできるじゃないかとか、うちはもっといいことをやろうじゃないかというサイクルができて。2019年、20年には全国でいろんなイベントができるような、そういう形にもっていきたいというふうに思っております。

あと小西委員からおっしゃっていただいた、持続可能性について柱だけではなくて、全てのイベントについて考慮してほしいというのは、なかなか義務化までは難しいんですけれども。我々は、やはりボランティアもそう思っている、なるべくそのイベントにはボランティアを活用してほしいということをお願いしようと思ってますので。それと同じような形で、イベントについては持続可能性に配慮してくださいという要請というか、チェックマークをつけるような、そういった取組は検討していきたいと思っております。

あと森口委員のスケール感ですが、これは全くわかりません。これ、我々が未知の領域に踏み込んでいるところもありまして。大体オリンピック・パラリンピックで言いますと、文化と教育というのは二つ大きな柱がございます。ロンドンではちょっと広がりがございましたけれども、こういうことでスポーツとか健康という柱をつくったり、持続可能性、街づくりという柱をつくったり、あるいは経済、テクノロジーの柱をつくったりということで。分野横断的にやっていくというのは、あまり例がなくて、具体的にそれぞれの分野でどのぐらい出てくるかはわからないところがございます。広く参画を求めようということで、もしかしたら、かなりのうれしい悲鳴が上がるかもしれませんが。やはりそういったときには、自治体との連携というのは非常に大事だと思っております。やっぱりクオリティもそうですけど、我々最も恐れますのは、非スポンサーがちょっとずるをしてとかいうこと以外に、オリパラの名を語って、いいイベントですよと言って詐欺であるとか悪質なことをやってしまう可能性があると。そういった団体をどうチェックするかというと、我々は東京都の足元でもなかなか難しいですし、ましてや離れてしまうと、本当にチェックのしようがないと。そういうときに、やはり地域とうまく連携をして、そういったチェック体制をつくっていきたいと思ってます。それによって、より善意のものを拾うことができますし。恐らく我々だけで、全部インハウスでやるよりも、大きく広く認証ということをできるんじゃないかと、今、そういうことを考えております。

- 髙座長　ありがとうございました。
- 中村企画財務局長　すみません、もう一つだけ。

是非、この持続可能性の分野でも、前半に御説明いたしました、この運営計画をこれからつくっていくというプロセスは非常に大事だと思っておりますけれども。それに加えて、非常に宝の山だと思っております、もったいない運動とか、日本はこういうことに熱心な運動ってできていると思いますので。そういった運動を是非紹介をして、広げることを検討します。世界にも紹介できるような形にできればと思っていますので、この参画プログラムの方も是非いろんな団体に持続可能性の分野そのものでも参画していただきたいと強く願っておりますので、よろしくお願いいたします。

- 髙座長　ありがとうございました。このプログラムの目的というのは、オリパラのムーブメントの促進と、レガシーの創出に向けたアクションの促進、これを目指していこうとするもの。その意味で、これは入口を広くし、できるだけ多くの人に手を挙げてもらうための仕組みということですね。
  リスクの管理ですけど、いろいろあるでしょうけれど。少なくともこの運動に参加される方は、目的を明確にして、責任者は誰なのか、住所はどこなのかなども開示していただく。また少なくとも年に1回、数千字まではいかないかもしれませんが、活動内容の報告を行ってもらう。ネット上に開示し、見える形にしておく。これが一番の歯止めになると思います。御検討いただければ幸いです。最後にどなたか意見がありますか。吉田先生。

- 吉田委員　今の規模感というので、たまたまちょっと御参考までに。私も関わっているIUCN日本委員会なんか、やっぱり2020年というのが目標で、生物多様性、愛知目標に参加する団体を2020年までに2020団体にするということをやっていまして。私たちが達成できないで、こちらが達成できたらちょっと悔しいんですけれども。でも、それにはやっぱり大事なところは、こういう基礎要件のところをちゃんとチェックするということと、質をちゃんと保つということと同時に、やっぱりエンカレッジして、たくさんの人に参加してもらうということと両方が大事なんです。やっぱりそういうことだと、大事なポイントは紙ベースの申請で審査会みたいなのという、そういう伝統的なやり方もあるかもしれませんけれども。インターネット上で、これはちゃんと満たしているかどうか自分たちでちゃんとチェックして、宣言してもらうと。そして、ここに書いてあるこのページでいくと、スライドの14ページに書いてあるように、幾つか要件が書いてありますけど。こういう視点を満たしているものであるということを、ちゃんと自分でチェックしていただいて、これにどれも当てはまらなければ、それはちょっと当てはまりませんよということでしょうし。ネガティブチェックのところでバツがつけば、それはだめだということでしょうし。そういうことについてインターネット上で、まず自分でチェックできると。それから、もう少しアドバイスが欲しいんだったら、どなたかにメールでも電話でもアドバイスがもらえるというような、そういうやり方をしておけば、まず基本よっぽど悪質なものはちょっとそれで難しいかもしれませんけども、基本一応性善説に立てば、間違ったものを登録してしまうということが、ベーシックなところでは回避できるんじゃないかなと思いまして。ちょっと御参考までに申し上げました。

- 髙座長　はい、枝廣さん。

- 枝廣委員　規模感として、ロンドンは数万だと聞いています。この持続可能性の分野で、いろいろNGOの活動をとっておっしゃっているんですが。今、市民の環境意識がすごく下がっていて、環境だけを前面に出したイベントなどすごく難しいのです。ですので、例えばスポーツイベントとか文化的なイベントをやりながら、それと持続可能性とかけ合わせてという形のイベントの方がずっと多いのです。
  少しだけ気になったのは、五つの分野を切り分けて、それぞれを認証していくというときに、持続可能性は特に他の分野とのかけ合わせで出てくることが多いと思うので、その辺り、応募してくる方々にも、もしくはこちらの体制的にも混乱の無いように、是非考えていただければと思います。

- 髙座長　はい、ありがとうございました。それではもう1点だけ。これは事前の説明のときにも申し上げたんですが。委員の皆さん方はよく理解されているかもしれませんが、運営計画とアクション＆レガシープランというのが、どういうふうに違うのかがよくわからない。これを開示していったときに、一般の人はますます混乱してしまうのではないかと懸念しております。そこを整理していただきたい。今日の話を聞いていると、多分、運営計画の実行主体は組織委員会と、都と国だと思います。今日の説明だと、アクション＆レガシープランというのは、この運動を全国的に広げていくための計画というイメージのような気がします。そうすると、実行主体は国とかそういうものに限定されない。東京都にも限定されない。より多くの方が参加できるものにしようとしておられる。是非、このような整理でよいものかなども含めて、事務局で整理しておいていただければと思います。
  本日は活発な御議論をいただきまして、ありがとうございました。
  最後に事務局、今後のスケジュールについて御説明お願いいたします。

- 田中持続可能性部長　今日はどうもありがとうございました。運営計画の案につきましては、本日いただいた御意見を踏まえまして、来月パブリックコメントを実施しようと考えておりますので、そこに向けて精査していきたいと考えております。それと並行いたしまして、個別に御相談させていただいたり、ワーキンググループ等開催していきますので、皆様方には引き続き御協力のほどをよろしくお願いいたします。
  本日はお忙しいところ、どうもありがとうございました。

以上